

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284042

研究課題名(和文) プレゼンス論とアブセンス論の統合を目指して--日欧の現代演劇の比較論的考察

研究課題名(英文) Toward integrating presence and absence theories in the modern Japanese and European Theatre

研究代表者

平田 栄一郎(Hirata, Eiichiro)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：00286600

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,400,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ演劇学で論争となったプレゼンス論とアブセンス論の統合を目指す本研究は、演劇上演ではプレゼンスとアブセンスの状況がパラドキシカルに生じていることを、現代日本と欧州の演劇作品を例にして明らかにした。この状況が同時かつパラドキシカルであることは、声や身体の動きが「ある」ようにみえるが、そうでは「ない」かもしれないという観客側の受容の不確かさに顕在化される。

本研究はこの不確実な観劇体験を経て、社会で起きる「ある」と「ない」をめぐる問題に対して私たちがより確実に把握する認識姿勢につながることを明らかにした。プレゼンスとアブセンスのあいだの不確かさは、私たちが物事を把握する際の確かさを保証する。

研究成果の概要(英文)：This Research aims to integrate the theories of presence and absence which have been regarded as contradictions in the German theatre studies in recent years and to create a new theatre theory which explains theatrical phenomenon and perception of audiences more substantially. This theory argues that the theatrical phenomenon appears in a paradoxical situation of presence and absence. This paradox applies to the perception of audiences who are not always sure if the theatrical phenomenon has been presented just as they have seen them on the stage. The presentation on the stage is thus connected with the absent situation of audiences who cannot perceive the presentation as it is. This unsureness of their perception can promote the ability of their own perception in their daily lives, because they can reflect on their limit of perception itself through their theatre experience between present and absent situations.

研究分野：演劇学

キーワード：パフォーマンス研究 日本演劇 ドイツ演劇 ヨーロッパ演劇

## 1. 研究開始当初の背景

今世紀初頭から 10 年ほどにわたり、ドイツの美学・演劇学においてプレゼンス美学がアブセンス美学のどちらかが有効であるかについて議論が展開された。

演劇は「今ここ」(hic et nunc)に演技手(俳優)と観客が一堂に会することで成立する芸術ジャンルである。プレゼンス美学論者は、「今ここ」に立ち現れる直接的コミュニケーションの状況をプレゼンスの現象として重視し、アブセンス美学論者はその状況において消えゆくもの、あるいは、観客受容の次元で零れ落ちるものを不在の現象とみなした。双方の論者は共に、舞台芸術独自の特徴が自分たちの主張する演劇観にあるとみなし、相手の論の限界を指摘しつつ、自説の有効性を説くことで、プレゼンス・アブセンス論争を展開した。この論争の結果、ドイツ演劇美学では演劇現象と、それを知覚する観客の受容において「ずれ」が生じており、観客がこのずれを意識することで、自分の知覚態度に省察を促す効果に演劇の可能性があるとみなされるようになり、結果としてこのずれを重視するアブセンス論者が優勢となった。

「今ここ」の直接的にコミュニケーションにおけるダイナミズムはコンサート、ライブイベントなどの演劇以外のジャンルでも十分にその魅力を発揮できる。舞台芸術ならではの可能性があるとしたら、それは、観客が直接的なコミュニケーションにおいて知覚・認識したことに誤解や限界があると気づく省察的な経験である。この経験を可能にするのは、「ある」はずなのに「ない」状況を作り出すアブセンス重視の舞台作品であり、それゆえにアブセンス美学のほうが舞台芸術ならではの可能性を引き出すにふさわしいとみなされた。

## 2. 研究の目的

プレゼンスとアブセンスの統合を目指した本研究の目的は、この論争において抜け落ちた舞台芸術のもう一つの可能性を、日欧の舞台作品の分析を通じて導き出すことである。

ドイツの演劇学が論争において自説の有効性を主張し、相手の論を論駁することで、美学上の偏りが生じた。プレゼンス論者は、「今ここ」の演劇現象のダイナミズムや、舞台と観客との直接的関係性を重視するあまり、演劇表現が力強いプレゼンス美学の舞台作品を考察対象にする一方、アブセンス美学の舞台作品について積極的に論じない傾向にある。アブセンス論者は、演じない・踊らないとみなされるほど表現をそぎ落とすアブセンス美学の舞台作品を好む一方、演劇表現が明確な作品を軽視する傾向にある。

本研究はこの偏りから脱して、プレゼンス美学とアブセンス美学のどちらの作品も考

察対象にすることで、どちらの美学においても通用する演劇観を確立することを目的とした。

本研究は、このような統合的演劇観を確立することで、舞台芸術の新しい可能性を導き出すことができるという立場を取った。それは以下の「研究成果」で詳しく述べるが演劇現象は「ある」(プレゼンス)と「ない」(アブセンス)の両極のあいだにおいて生じており、各現象はこのあいだにおいてパラドキシカルな関係性を孕みながら、両極のあいだを行ったり来たりしながら生じ、そのようにして演劇上演が展開されるというものである。観客は意識するにせよ、そうでないにせよ眼前の演劇現象が本当に「ある」かそうで「ない」かについて完全な確証を得られないまま、演劇上演を見続けるのだが、その際、観客受容においても、「ある」と「ない」の状況は重要な役割を占めている。

舞台芸術は表現の次元でも、受容の次元でも、プレゼンスとアブセンスの両方が同時に作用している。しかも両者は単に相互作用的に生じるわけでない。相互作用的に両者が生じるのは、一般的な直接的コミュニケーションである。演劇が「舞台芸術」たらんとするならば、「ある」と「ない」の両極が相互的關係のみえる状況を問い直し、両者のあいだにずれや溝、齟齬などがあることを観客に気づかせ、観客の知覚や認識を遊戯空間において揺らがせることに可能性がある。演劇がこの可能性を追求するならば、現象や受容プロセスにおける「ある」と「ない」の関係性には逆説的なものがあるはずである。

本研究はこのような仮説を立てて、それが実際の演劇上演においてどのようにして生じるのかを探究し、この仮説の有効性を検証することを目的とした。

## 3. 研究の方法

この仮説の有効性を検証するに当たり、本研究は次の 4 つの研究方法を用いた。

- (1) 国内外における演劇学の資料調査とその解読
- (2) 国内外で行われる演劇祭や演劇上演の実地調査
- (3) 本研究に関連する演劇研究・実践を行っている専門家を招聘してのシンポジウム・講演会・研究会開催と、そこで行われる議論
- (4) (1) から (3) を踏まえた本研究従事者による考察

本研究は、研究期間に当たる平成 25 年 4 月から 28 年 3 月までの 3 年間、これらの 4 つの研究を定期的に行った。上記の 4 つの方法のうち代表的なものを以下に記す。

### (1)

国内では早稲田大学演劇博物館などにおいて現代演劇と能に関する資料調査を行った。国外ではライプツィヒ大学演劇学研究所

において、同研究所の研究者から本研究に関する資料の照会をしてもらい、資料調査を行った。

(2)

国内では静岡芸術劇場で開催される演劇祭「ふじのくに世界演劇祭」や京都で開催される演劇祭「Kyoto Experiment」などで実地調査を行った。また京都で活動する劇団・地点などから、現代演劇やドイツ演劇に関するヒヤリング調査を行った。

(3)

国内外から演劇研究者や演劇実践家を研究代表者の所属先に招聘し、研究テーマに関する講演会・シンポジウム・研究会を行った。以下に招聘者と研究テーマについて列挙する。

パトリック・プリマヴェジ(ライプツィヒ大学演劇学研究所教授): 講演会: 演劇と政治的なもの 2013年9月 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

ハンス=ティース・レーマン(フランクフルト大学名誉教授)、ヘレーネ・ヴァロブルー(演劇研究者、ギリシャ出身): シンポジウム: ポスト悲劇について 2013年12月12日 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

トーマス・レーメン(ベルリン在住の演出家・振付家): 研究会: 街頭劇のハプニング性について 2014年3月7日、14日 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

ギュンター・ヘーグ(ライプツィヒ大学演劇学研究所所長・教授)、針貝真理子(慶應義塾大学他非常勤講師) シンポジウム: 演劇と不在 2014年4月12日 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

ラルフ・シュネル(ジューゲン大学名誉教授、同大学元学長): 研究会: プレヒトの戯曲『ファッツァー』について 2015年9月1日 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

ギュンター・ヘーグ(ライプツィヒ大学演劇学研究所所長・教授) 講演会: 越境文化と芸術 2015年10月1日 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

ドリス・コレシュ(ベルリン自由大学教授)、針貝真理子(慶應義塾大学他非常勤講師)、石見舟(慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程1年): 声の(不)可聴性について 2015年12月12日 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

ダニエラ・ハーン(ベルリン自由大学講師): 講演会: 環境演劇の再来 2016年1月28日 於: 慶應義塾大学三田キャンパス

(4)

上記のシンポジウム・講演会・研究会における発表者の主張とその後の議論を通じて、演劇におけるプレゼンス論とアブセンス論に多様な考え方があることを把握し、研究の考察を広げていった。例えばプレゼンスは「今ここ」を意味するが、歴史的事象という過去の出来事とプレゼンスが演劇上演において組み合わせることで、プレゼンスは、過

去の遺物(アブセンス)と密接に関連している側面がある。

アブセンスでは、不在の要素が観客の知覚や認識に強く影響を及ぼすとき、アブセンスのプレゼンテーションが協調され、アブセンスとプレゼンスが同時に介在する。このようにプレゼンスとアブセンスが演劇上演ではしばしば観客を戸惑わせるようにして同時に介在する点を把握するに至った。

#### 4. 研究成果

このようにプレゼンスとアブセンスが同時に介在する演劇上演の調査と考察を経て、本研究は、両者の特徴を踏まえた演劇観を提唱した。その特徴とは、演劇上演では、プレゼンスとアブセンスが逆説的に関わり合いながら、観客の知覚・認識に届くことで、観客の演劇独自の経験をさせるに至るというものである。これが従来のプレゼンス論とアブセンス論に基づく演劇観に欠けていた。このパラドキシカルな関係について以下に述べ、それがいかに重要な演劇観であるかについて説明する。

演劇は、何かが起きることを前提に成り立つが、そのような出来事が台詞の語り・演技・音響や視覚効果によって多様な様相を呈しつつ、そのつど現れては消えてゆく。次々と生じては消えゆく「はかない(ephemer)」現象を、観客は完全に把握することができない。演劇の現象は、観客の知覚・認識の網から何かがこぼれ落ちる不完全さを基にしてしか成り立たない。それゆえに演劇は、再生可能なメディア映像や、同じ箇所を何度も読み返したり、見直したりすることができる文学や絵画と異なり、観客が再生不可能な出来事をそのつど見逃していく受容困難な芸術ジャンルに位置づけられる。

観客は舞台上の出来事をしっかりと把握・認識できない以上、自らの受容行為に確信を持つことが難しい。このとき観客は、舞台上の出来事が本当に「ある」か「ない」かという問題のあいだで不確実な状況に置かれる。演劇の現象は立ち現れては消えてゆくはかなさを特色とするがゆえに、観客は自分が見ているものが、本当にそのとおりであるかどうかをめぐり、判断が揺らぎやすい。ここに演劇上演に特有のプレゼンスと不在の基本的特徴が見出される。すなわちそれは、上演において観客はプレゼンスと不在とのあいだで不確実なまま揺らぎながら、演劇的現象を見るという特徴である。ここにプレゼンスと不在をめぐり、従来と異なる演劇研究の可能性が見出される。演劇上演を単にプレゼンスの立場から、あるいは不在の立場から探究するのではなく、両方の立場から特徴づけることにより、プレゼンスと不在の論争が見落としてきた演劇の特色が導き出されるだろう。

その特色とは、演出や演技の創意工夫によ

り観客が「ある」と「ない」のあいだでパラドキシカルな状況に陥ることで、演劇ならではのダイナミズムが観客に生じることである。ただしこのダイナミズムは、プレゼンス論が好む感性的な側面に留まらない、多様な受容プロセスを踏まえた動力学に基づく。それは、イリュージョンの効果によって舞台上に何かが「ある」と思えることと、そうでは「ない」かもしれないと感じる疑念とのあいだで、観客が葛藤をかかえたり、自分の観劇行為を省察し続ける際に作用する動力学である。私たちが演劇を見るとき コンサートのように 音という特定の知覚対象を基にして「今ここ」の現象に集中するわけではない。また絵画をじっくりと鑑賞したり、読書行為において想像や解釈をめぐる際に特徴的な思索だけをするわけでもない。むしろ演劇上演において私たちは、何かが立ち現れては消える「今ここ」の多様な動き・静止状態・変化を、感性と知的側面の両方を多種多様に働かせることで受け止める。つまり観客は、眼前で起きる演劇的現象に対して感性的な衝動や葛藤を感じつつ、戸惑ったり、自問したり、自らの観劇のあり方を省察することによって多様な受容活動を行うのである。感性的衝動は、プレゼンス論が観客の受容論において積極的に提唱してきた特徴であり、自己の観劇のあり方を問う省察は、アブセンス論が積極的に提唱してきた特徴である。演劇上演と観客の受容プロセスを、「ある」と「ない」をめぐる揺らぎの立場から捉える本研究は、従来のプレゼンス論とアブセンス論の特徴を活かしたものとなる。

このように観客が「ある」と「ない」の状況をめぐって戸惑う不確実な観劇経験が、逆説的な効果をもたらす。観客は不確実な観劇経験の現実を直視することで、社会に実際に起きている「ある」と「ない」をめぐる問題により確実に向き合うことができる。テリー・イーグルトンやモーリス・ブランショ、ベルギーの演劇評論家エルヴィン・ヤンスが指摘するように、私たち現代人は現実社会における「ある」と「ない」の問題をめぐる状況を中立的に捉えることができず、往々にして逸脱・過剰化してみずから自己矛盾に陥る傾向にある。私たちは、自分たちや周囲の「ある」現状に飽き足らず、それをそのまま受け止めずに、かえって過剰な方向へもたらしてしまう。他方、私たちは、何かがない、あるいは足りないという不在の状態を無意識のうちに 不安に思うあまり、不在をナショナリズム、原理主義、昔はよかったというアナクロニズムなどの安易な代替物で埋め合わせようとする傾向にある。このように「ある」と「ない」のそれぞれの状態を悪しき方向に向けがちな現代人の傾向を再考する際に、演劇上演において「ある」と「ない」の問題をめぐって揺らぎつつ自省する演劇経験は有益となりうる。私たちは演劇上演という虚構の経験において両者をめ

ぐる否定的で自己矛盾的な状況と多様に直面することで、社会や現実における両者の問題から安易な方向へ向かいがちな自分と向き合うことができる。観劇経験において自己と向き合うことは、現象論者ベルンハルト・ヴァルデンフェルスの言う「異他としての自己」との「遭遇」に置き換えて捉え直すことができる。私たちは普段、矛盾に満ちた自己と向き合おうとしないものである。しかし舞台作品を見るという経験において、そのような「異他としての自己」との「遭遇」を遊戯的に受け入れることができる。そうして私たちは観客として、フリードリヒ・ニーチェの「強さのペシミズム」に暗示されるように、「ある」と「ない」とのあいだで矛盾に陥る自己の限界や異他性をしっかりと受け止める胆力を陶冶することができる。この受動性は一見すると、積極的で具体的な行為の地平が開かれない点において消極的にみえるかもしれない。しかし観客が舞台作品を見ることの可能性は、解消しがたい矛盾の状況に直面した際に、それを解決したり、解決のために決定を下すといった「措定」をするのではなく 文学研究者ヨーゼフ・フォグルの逡巡論が示唆するように 解決困難な状況下に置かれて迷いつつ、「ある」と「ない」とのあいだで往来し続ける自分の現実を受け止めることである。すぐに解決できない状況に置かれる「異他としての自己」を受け止めることは、単なる受動性に留まらず、自己の否定性としてしっかりと向き合う胆力を陶冶することにつながる。この胆力陶冶の可能性をもたらずのが、「ある」と「ない」とのあいだで観客を揺らがせる在と不在の演劇上演なのである。

以上の演劇観が、プレゼンス論とアブセンス論の統合を目指して行った本研究の結論である。この結論を個々の舞台作品や、日欧の演劇に多く当てはまることについて、5に挙げる研究論文・研究発表・書籍において明らかにした。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

平田栄一郎 : Theaterversuche »Mit Tokatonton«. Zur Vielfalt der Echo-Kräfte in Chitens Tokatonton to.

In: Veronika Darian et al. (eds): Die Praxis der/des Echo. Zum Theater des Wiederhalls. Peter Lang 社、2015年9月 65-76頁 査読無

平田栄一郎 : Dramaturgy of separated elements in the experimental Japanese theatre.

In: Magda Romanska (ed.): The Routledge Companion to Dramaturgy. Routledge 社、2014年9月、87-93頁 査読無

平田栄一郎 : Tragödie des Offenen. Zu

Agamben, Nancy und dem japanischen Körpertheater.

「藝文研究」第 106 号所収、2014 年 6 月、234-252 頁 査読無

平田栄一郎：気配のダイナミズム クロード・レジ演出『室内』を手掛かりに

「三田文学」第 117 号、2014 年 4 月、267-271 頁 査読無

平田栄一郎：不在と在の二重性  
慶應義塾大学「藝文研究」第 105 2 号所収、2013 年 12 月、254-279 頁 査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

平田栄一郎：Unerreichbare Stimmen im Nô-Theater 藝文学会シンポジウム：(Un)vernehmbare Stimmen 於：慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)、2015 年 12 月 12 日

平田栄一郎：Schattendramaturgie im Brecht- und im traditionellen japanischen Theater 国際ゲルマニスト学会研究発表会 於：同済大学(中国上海市)、2015 年 8 月 29 日

平田栄一郎：Tragödie des Offenen. Zu Agamben, Nancy und dem japanischen Körpertheater 藝文学会シンポジウム：Tragödie nach der Tragödie (ポスト悲劇の悲劇) 於：慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)、2013 年 12 月 12 日

〔図書〕(計 1 件)

平田栄一郎：在と不在のパラドックス 日欧の現代演劇論』(単著)三元社、2016 年 5 月、計 396 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

(1)研究代表者

平田 栄一郎 (HIRATA, Eiichiro)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：00286600

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし